

概容報告

スローフードジャパン副会長
スローフードすぎなみTOKYO代表
佐々木俊弥

■韓国のスローフード・カルチャーセンター・コリア

韓国のスローフード・カルチャーセンター・コリアという支部が韓国の京畿道（キョンギド）南楊州（ナミュヤンジュ）市内にあります。

ナミュヤンジュ市と市長がスローフードを積極的に推進し、できた支部と言えます。

特に現市長の李錫雨（イ・ソグ）氏が熱心で、彼のでこ入りで、カルチャーセンターという建物がスローフードの中心地として2008年頃から本格的に活動を開始しました。



ここが主催で、9月28日～10月1日、テッラ・マードレ・コリアとスローフード・アジア・オセアニア・カンファレンスが開かれる、ということで、執行部に参加要請が来ました。

今回、招聘を受け、参加したのは国数でいえば14ヶ国。

韓国内にあるいくつかの支部リーダーや食にまつわる識者も参加し、イタリア本部からも、パオロ・ディ・クローチェ氏とエレナ・アニエル氏（アジア・オセアニア）が参加しました。

会議はすべて英語で行われるとのことで、スローフードジャパンからは佐々木が参加させていただきました。



李錫雨（イ・ソグ）南楊州（ナミュヤンジュ）市長

■南楊州（ナミュヤンジュ）市の一大有機農業地帯と、韓国政府主導の「4大河川再生事業」

南楊州（ナミュヤンジュ）市は人口46万人。

市の紹介サイトが、日本語であります。

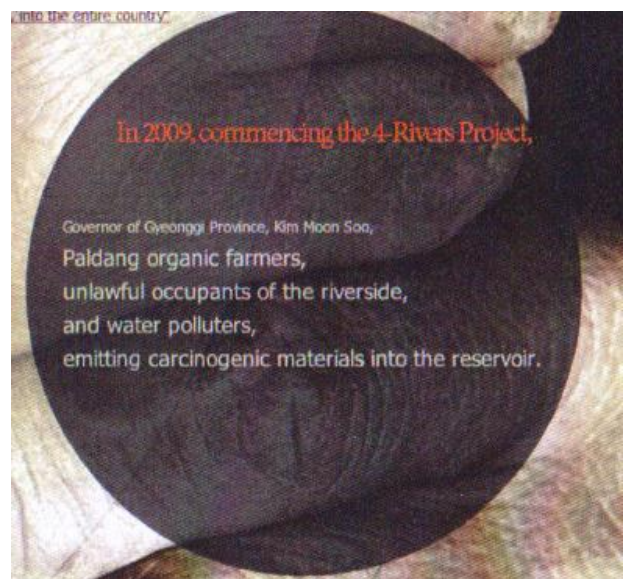
<http://www.nyj.go.kr/japanese/index.jsp>

このパルダン地域というところは、アジア有数の一大有機農業地帯として有名です。

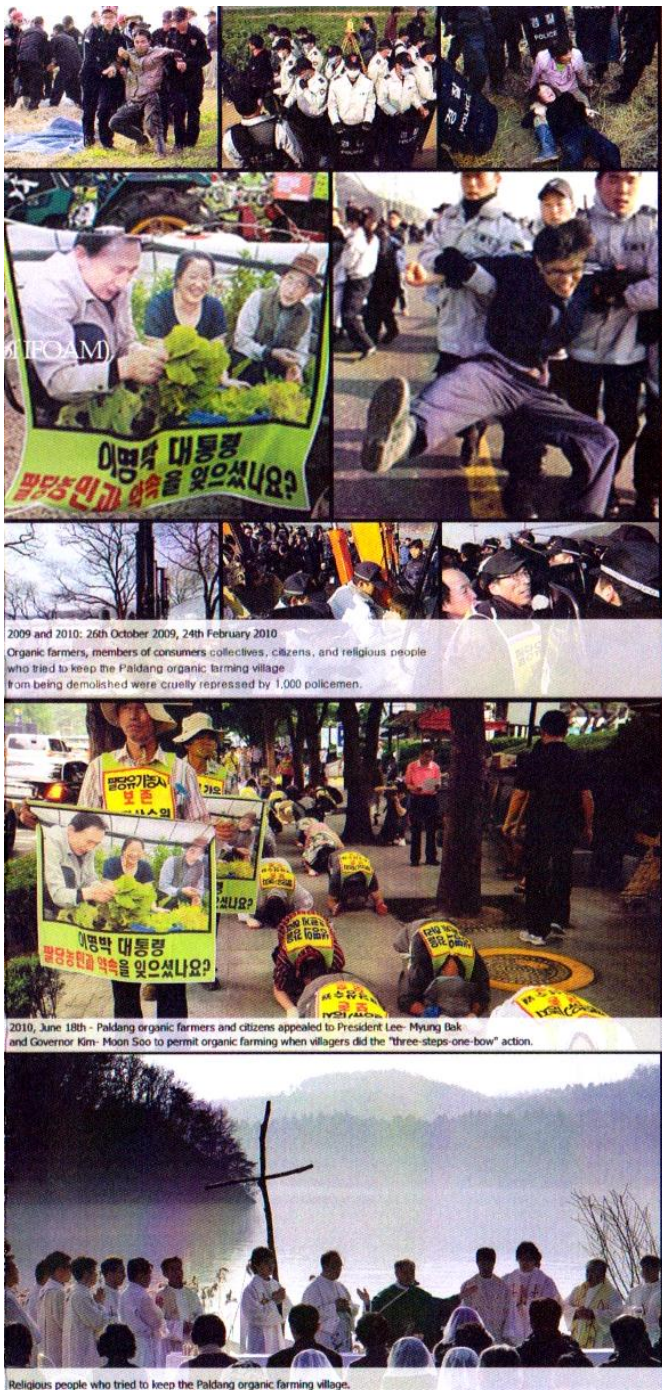
それには背景があります。

パルダン地域にはダムがあり、ソウル及び首都圏2000万人の供給源となるダムとして1973年に建設、1975年に保護地区に指定されました。

そこで周辺の農民たちは巨大水源地の農薬などによる汚染を回避すべく皆、有機農業へと転換を計り、30年以上をかけてパルダン地域に一大有機農業を形成してきました。



しかしこの地域に、李明博（イ・ミョンバク）大統領が政権に就いてから周辺にある「4大河川復興計画」がぶち上げられ、計画の中に100件以上の有機農家の耕地が引っかけられており、有機圃場81ヘクタールが突如として開発されることとなりました。



2009 and 2010: 26th October 2009, 24th February 2010
Organic farmers, members of consumers collectives, citizens, and religious people who tried to keep the Paldang organic farming village from being demolished were cruelly repressed by 1,000 policemen.

2010, June 18th - Paldang organic farmers and citizens appealed to President Lee Myung Bak and Governor Kim Moon Soo to permit organic farming when villagers did the "three-steps-one-bow" action.

Religious people who tried to keep the Paldang organic farming village.

キム・ビュンスー氏がくれた地元農家の結束を呼びかけるリーフレットより

この、韓国政府主導の「4大河川再生事業」のもと、農家は政府の計画に従って何年も無農薬で耕してきた。農地を捨て移住することを求められました。政府によると韓国の河川を今後予測される早魃や洪水を防ぐための開発は必要であり、住民は政府に当然協力すべきであると勧告してきました。

昨年10月に政府側は現地の測量を1000人の機動隊をとまって決行。反対の有機農家、生協の消費者は座り込んで測量を止めさせようとしたが、機動隊によって強制移動させられました。

さて、今回のスローフード・アジア・オセアニア・カンファレンスを主催したスローフード・カルチャーセンター・コリアの理事キム・ビュンスー氏は、その有機農家の一人。

もともとエンジニアだった彼は、ある日、のちの師匠となる有機農家の人の講演を聞き、いたく心を打たれ、農業家になる決意をした、といます。

パルダン地区に、IFOAM（世界有機農業連盟）のアジアで初となる年一回の世界大会を誘致することが、2008年、イ・ミョンバク政府側から持ちかけられます。

「IFOAMの世界大会誘致に協力すれば、「4大河川復興計画」を再検討してもいいともいわれ、キム・ビュンスー氏をはじめ1,000の有機農家はそれに協力することにした、といます。

しかし、政府側はそれを全く守らず、「4大河川再生事業」に着手、キム・ビュンスー氏の畑も1ヘクタール取り上げられたといます。

「イ・ミョンバクは嘘つきだ!」と、ビュンスー氏は声を荒げていました。

「来年の大統領選では、イ・ミョンバクのハンナラ党の再選は絶対阻止する。われわれ1,000の農家の結束は固い」と、熱く語ってくれました。

IFOAM（世界有機農業連盟）の世界大会の誘致は3年前に決まり、しかし、イ・ミョンバク政権に失望したナムユンジュ市と有機農家たちは、いわば対抗策としてスローフード運動を別途、推進することにしたのです。

パオロと話す機会があり、スローフードとIFOAMというのは関係としてはどうなのか訊いてみたところ、「彼ら（IFOAM）は、有機農業の世界共通の規則を定めたり、運動というよりは機関という性格が強い。スローフードの運動性の方向とは合致しないと思う。もちろん協働の可能性を否定するものではないけれども」と語っていました。

■アジア・オセアニアのスローフード運動



今回、IFOAM（世界有機農業連盟）世界大会と同じ会場内でテッラ・マードレ・コリアとスローフード・アジア・オセアニア・カンファレンスが開かれることは聞いていましたので、私は当初、ナミュランジュ市がIFOAMとスローフード双方を抱き込んで、アジアの一大オーガニックセンターを宣言しようという野心があるのか、と思っていました。

しかし、上のような背景を知り、むしろナミュランジュ市にとってIFOAMはライバルで、スローフードを推進しつつ国の政策（4大河川再生

事業、有機農家の追い出し）に対抗しようとしているのだ、ということがわかりました。

さらに、市とスローフード・カルチャーセンター・コリアが参加者全員の移動費（航空券、宿泊費、食事代）をすべて持ち、わざわざこのような機会を設けたのも、彼らがアジア・オセアニアにおけるスローフードの盟主になりたいからではなく、上記、IFOAM（世界有機農業連盟）世界大会に対抗する意味で、世界的運動であるスローフードの一員であることを見せる必要があったのだと思われます。

現に、各国のスローフードリーダーと韓国内の支部リーダーたちを交えたフリートークのなかで、上記キム・ビュンスー氏は、「今後のアジア・オセアニアのスローフード運動のリーダーを、ぜひ日本にとってもらいたい」と言われました。

これに対し私は、

「日本は支部は多く、皆さんに比べればスローフードに関わってきた年月も長い。が、国レベルでアジア・オセアニアのリーダーを務めていけるだけの力は残念ながら、いまはない。ひとつには今年春の大震災、原発事故で日本のスローフード自体を再構築しなければならない時期に来ていること。そしてスローフードUSAのように国レベルで運動を推進していくというよりは各地域の支部が単位となってそれぞれの地域の課題に取り組んでいるので、一国単位でアジア・オセアニアに関わっていくのはこれからの宿題をしたい」と述べるにとどめました。



パオロからは、

「来年トリノで行われるテッラ・マードレは、参加してもらう人を絞ることになるかもしれない。興味のある人がただ参加するのではなく、各国や地域で実際に動いている人に参加してもらうようにする。そして、国や地域の食にまつわる展示を増やしていきたい。これは国単位である必要はない。アジア・オセアニアで共通の何かを共同で展示するのもいいと思う。たとえばコメなどは典型的な例だろう。それはお互い連絡を取り合って、ぜひ可能性を探ってもらいたい」と提案されました。

これが実現するかどうかは今回知り合った各国の代表たちと連絡を取り合いながら、あるいは可能性が見えてくるかもしれません。

なお、スローフード・カルチャーセンター・コリアが中心となって韓国に現在8あるコンビビウムをまとめ上げ、スローフード韓国として正式にスローフード・インターナショナルの理事会に加わる調印式が、パオロ・ディ・クローチェ氏と、スローフード・カルチャーセンター・コリアの代表アン・ジョン・ウン氏との間で取り交わされました。



また、「テッラ・マードレ・ジャパン in 雲仙」に韓国のメンバーに来ていただくべく、黒川陽子さんからハングルに翻訳してもらった案内をいただき、フリートークの際に宣伝をしたのですが、スローフード韓国として前回（2010年）同様、来年もサローネ・デル・グストにキムチブースを出展すべく準備中で、その資金をセーブしているところだそうです。

よって、参加は難しいかも、とのことでした。

ちなみに前回（2010年）のサローネで、出展料、輸送費、運賃等で1,000万円以上かかったとのこと。

■テッラ・マードレ・コリアと スローフード・アジア・オセアニア・カンファレンスについて



9月29日（木）に開会式がありました。

李錫雨(イ・ソグ)ナミュヤンジュ市長はじめ、市の方々や、IFOAM（世界有機農業連盟）の代表の方等、錚々たるメンバーが集まり、屋外で執り行なわれました。

国や民族の多様性をテーマに、開会式には各国の民族衣装を着て欲しいという主催者側からの要望があり、私（と妻）は着物を着て参加しました。

ところがこの日は大雨で、足元が悪く、足袋や草履は雨水でぐっしょりでした。それでも、やはり日本の着物には会場に見えた皆さん、ずいぶん関心を示しておられました。

その様子を含め、写真を下記に載せました。

1. <http://bit.ly/qbODJi>
2. <http://bit.ly/qO16ev>
3. <http://bit.ly/qFaGwU>
4. <http://bit.ly/r2OoZC>
5. <http://bit.ly/qKioCc>

セレモニー終了後は、各人によるスピーチです。

一人だいたい20～25分ずつ、韓国の人は韓国語で（英語同時通訳）、他の人は英語で（韓国語同時通訳）で発表しました。

各発表者のテーマは、以下のとおりでした。



■一日目 (9月29日 15:00~21:00) (雨のため、屋内施設で開催)



基調講演 パオロ・ディ・クローチェ (スローフード国際部部長) 「食の廃棄と飢餓～世界の食事情とスローフード運動」

1. アジア・オセアニアにおける食の危機と、食の尊厳、食の安全性

- メインスピーカー: キム・ジョンダク (韓国、スローフード・カルチャーセンター・コリア副会長、キョヌナム大学社会学部教授) 「グローバル・フード・システムとアジア・オセアニア地域の食の危機」
- 第1発表者: ラチャボーディン・ブーンチャイヨ

(タイ) 「食の安全と生活の安全」

- 第2発表者: アージュン・バッタライ (ネパール) 「後進国における食の尊厳と安全」
- 第3発表者: ヴィッキー・パディラ (フィリピン) 「エコロジカルな家庭あるいはスローホームの推進と、食の安全に向けてのパートナーシップ」

2. 食文化、持続的農業の多様性と伝統的知識:

- メインスピーカー: フラン・ロイ (インド) 「持続的開発を促進するにあたり、先住民の食と農業多様性から学べること」
- 第1発表者: ヴィッキー・ガルシア (フィリピン) 「山間部の価値あるおコメプロジェクト」
- 第2発表者: ジュン・ヒエキュン (韓国) 「スローフードの美学と韓国料理の文化的側面」
- 第3発表者: ルチャ・ジャヴハリエヴァ (タジキスタン) 「タジキスタンの伝統食」

3. 食のコミュニティの進展と、アジア・オセアニアにおけるネットワーク:

- メインスピーカー: エレーナ・アニエール (スローフード・インターナショナル) 「テッラ・マードレのネットワークを広げることの大切さ」
- 第1発表者: チョー・ワンヒュン (韓国) 「ハンサリム生協のローカルなオーガニックフードの共有」
- 第2発表者: キム・ビュンスー (韓国) 「アジア・オセアニアのスローフード・ネットワークを強化することの提案」
- 第3発表者: パーシー・ティペン (ニュージーランド) 「ニュージーランドで生産される“純粋な産物”のための先住民の認証システム」

■二日目 (9月30日 15:00~18:30)

4. 食の多様性の保護と、スローフードのプレシディア、味の箱舟、大地のマーケットなどのプロジェクト:

- メインスピーカー: チェリー・ライブ (オーストラリア) 「農業の多様性を維持することの大切さ」
- 第1発表者: テオ・ジャンケン (マレーシア) 「マレーシアのサラワクより、在来の多様なコメの可能性について」
- 第2発表者: パーク・サンジャン (韓国) 「韓国の多様性の危機と、味の箱舟、プレシディア計画の重要性」
- 3rdSpeaker: アキルベク・カシモフ (キルギスタン) 「キルギスタン・ヴァトケン谷における一般的なアングの多様性について」





5. 食育と味覚教育:

- メインスピーカー: 佐々木俊弥 (日本) 「スローフードすぎなみ TOKYO の味覚教育～小商店の協同コミュニティ “商店街” との協働」
- 第1発表者: ハユ・ディア・パトリア (インドネシア) 「食用の野生植物を通じた滋養知識」
- 第2発表者: パーベル・パーサ (バングラデシュ) 「地域の食の知恵・・・バングラデシュにおける食育の脱中心化」
- 第3発表者: リー・ヒュンジュン (韓国) 「ITを活用した感覚的味覚教育」
- 第4発表者: キム・エウニシ (韓国) 「ホピョン高校の学校プログラム」 (同校教師)

各発表、それぞれ興味深いものばかりで、事前に発表内容を英語で送り、それをハングルに翻訳されたものを併せ、一冊のプログラムが配られました。

逐一、その内容をお伝えすることは難しいのですが、総体的な印象としては、「新興国」の方々が多かったので、急速に進む近代化、都市化の流れにどう対抗しながら伝統的・持続的な農業や食の知恵、文化を守っていくかということが各国の課題である、というのが強く感じられました。

一方、私は、国として近代化を通り抜けるとどうなるか、日本各地における車社会化と郊外の大型ショッピングセンターの乱立、それに伴う駅前商店街の衰退、コミュニティの崩壊を述べ、いまや日本で過当競争に陥った大型ショッピングセンターがアジアを目指して出店していくことを述べ、その真逆な例としての地元・杉並区高円寺の例を挙げました。

すると、あとで、「韓国でもこの10年が、発表された状況になるかどうかの境目だと思う」という声を聞いたり、フィリピンやオーストラリアの代表からも、似たような状況が起こりつつある、と言われました。

日本は、G8唯一のアジアの一国であることから、つい欧米諸国と何事も比べる傾向がありますが、アジアで近代化を成し遂げた国として、アジアにその経験を伝え、またスローフードの先輩としても、彼らと対等に付き合いながらも、伝えるべきことを伝えていくべきであること、また彼らも日本にそれを望んでいることを肌で感じてきました。



【参考サイト】

南楊州パルダンでの世界有機農大会のこと

http://blog.goo.ne.jp/kankoku_zakkicho/e/b46982fc2131734a383649eb806f6350

2011年第17回IFOAM世界有機農業大会 <http://jpn.gg.go.kr/1781>

韓国・パルダン地域の有機農業 <http://ing-hompo.com/2010/01/post-80.html>

スローフードの街、南楊州 (ナムヤンジュ)

http://blog.goo.ne.jp/kankoku_zakkicho/e/7460a19e53351ca04cced29d33b07d2b

「2011年IFOAM総会 初日」 韓国ジョンギ郡ナムヤンジュ市 晴れ

<http://plaza.rakuten.co.jp/ksline/diary/?ctgy=0>